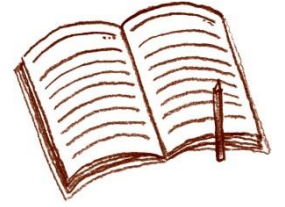
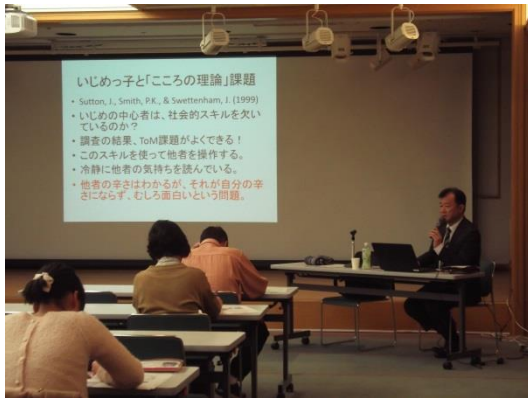


平成 29 年 2 月 23 日・3 月 2 日・3 月 9 日実施

## 「いじめから子どもたちを守るためにできること」～講座の様子～



### 【第 1 回】いじめって何？どうしたらいいのかな？



講師：戸田 有一さん

(大阪教育大学教育学部 教授)

☆「いじめ防止五カ条」「いじめ免疫プログラム」や世界各国の取組などを通し、いじめをエスカレートさせないために、保護者の方や先生ができることなどについて、お話いただきました。

- ・ いじめは「被害者」と「加害者」だけの現象ではありません。森田洋司先生（大阪市立大学名誉教授、国際的に高名で、国のいじめ・不登校対策の指導的存在の先生）らにより「いじめの 4 層構造」が示され、「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」などによる集団現象であると示されています。逃げられない関係のなかでの継続される攻撃問題なのです。
- ・ 一見、仲間に見える関係の中でいじめが起こっていると、被害者は誰にもいじめられていることを打ち明けません。加害者は被害者を「友達だろ？」という言葉で縛っています。
- ・ 中井久夫（著）『アリアドネからの糸』では、いじめの過程を「孤立化」→「無力化」→「透明化」と分析しています。いじめは、ターゲットが絞り込まれ、周りが被害者と距離をおく「孤立化」から始まります。周りにいじめを正当化する論理も流布されます。この論理は、近年、高度な言い訳である「道徳不活性化」として研究されています。いじめる側は、実はいけないとわかってやっているのです。単に道徳や規範を説く指導では、ほとんど効果はないでしょう。次の「無力化」とは、被害者を隷属させることです。「大人に言いつけたらどうなるかわかっているのか」と暴力を予見させて脅したり、一緒に悪いことをして先生に告げ口ができないようにしたりして、被害者を心理的に操作します。「透明化」とは、いじめが周りから見えなくなった状態です。
- ・ いじめの中心者は、社会的スキルがないわけではありません。むしろ巧妙な心理的操作ができるので、いじめが周りから見えにくいのです。そういう巧妙な子にも、クラス全体に働きかけるいじめ防止教育が有効なのか、再検討していく必要があると思っています。最近、傍観者を制止者にする、フィンランドのキヴァプログラムが注目されています。
- ・ 一方で、共感性の高い子は、いじめがある場にいられない可能性があります。共感性の高い子（たとえば、友達が落ち込んでいるところを見て、自分もしんどくなってしまおう子）に先生が共感することや、そういう子が活躍できる・居られる場の準備が大切です。（どういう場のあり方が大事なのかは、桜井先生のお話のなかで示されています）

## 【第2回】SNSやスマホを利用したいじめって、どんなもの？

講師：竹内 和雄さん

(兵庫県立大学環境人間学部 准教授)

☆SNSや無料通話アプリなどスマートフォンを利用したいじめの事例、そして、スマホに対する知識が少ない保護者が子どもに向き合うための方法などについて、お話しいただきました。



・いじめは変わってきています。大人は「見える」いじめの対策をしていますが、子どものいじめは見えないものが多いのです。

・LINEのトラブルはメッセージの打ち間違いや勘違いから始まることが多いです。たとえば、クラスメイトの女子同士のLINEグループでAがぬいぐるみの写真を掲載し、「このぬいぐるみ、かわいくない」とメッセージをつけました。翌日、AはLINEグループの他の女子生徒から無視されてしまいました。また、別の例では、クラス全員で映画に行くことになっている前日のLINE、B「映画楽しみ」C「私、バス」D「僕、自転車」E「俺も行く」F「E、なんで来るん？」E「やっぱり、やめとく」。翌日、EとFはケンカになりました。これはどちらも打ち間違いと勘違いから起きていることです。Aの例は「このぬいぐるみ、かわいくない？」と文末にクエスチョンマークをつけ忘れたことから、Eの例は、Fの「何に乗って来るのか」と交通手段をたずねたつもりの方が、Eには「なぜ来るのか」と理由をたずねているように聞こえてしまったことから、トラブルに発展してしまいました。

・LINEなどでトラブルが起きても、現代の子どもたちは修復の仕方を知りません。何かを相談されたときに大人がどうするのが重要です。何かあったときに騒ぎ立てたりしない、いわゆる「暴走しない」大人が必要です。

・「暴走」とは、いじめられていることを騒ぎ立てて大ごとにしてしまうことです。子どもが先生や親にスマホやネットに関わるいじめを打ち明けない理由は、「どうせ大人はスマホのこと、わからないから」、「いじめのこと話したら、朝礼で言ったりクラスみんなに言ったりして、大ごとにするから」、「自分の言いたいことばかり言うから」などです。

・スマホの問題は心の問題、子どもたちはスマホについて「大人はどうせわからない」と思っているので、先生や親に話さないのです。でも本当は聞いてほしいのです。ネットについて知らなくても、「自分はネットについてあまり知らないけれど、スマホやネットのトラブルに詳しい先生を知っている」と話し、詳しい人と繋いであげることが大切です。

・学校でのいじめ指導については、加害者が複数いる場合は同時に別室で指導をします。時間差があると、事前にLINEで口裏を合わせるのです。いじめ加害者が複数いる場合は、あらゆる工夫が必要になります。

### 【第3回】子どもをいじめから守るために、大人にできること

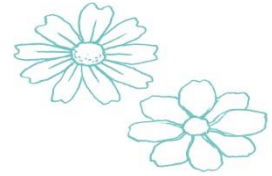


講師：桜井 智恵子さん

(大阪大谷大学教育学部教育学科 教授)

☆いじめをなくし、子どもたちを守るために大人ができることについてのお話、また、いじめが生まれやすい環境等について、お話いただきました。

- ・子どもたちは学校で同調圧力（周りと同じでなければいけない圧力）を感じています。子どもたちは常に空気を読み、緊張しているのです。そんな子どもたちに教職員は「きちんとしなさい、もっと頑張ろう」と言います。「こうあるべきだ」という圧力の中、子どもたちは「意見を言わない」大人へとなっていきます。
- ・学校での教育は、企業が求める人材を育成する教育になっています。このような教育の中で、子どもも先生も常に「こうあるべき」と、緊張した状態が続いています。個人の能力を上げることも、雇用政策での改善が必要です。雇用の格差を「教育で乗り越える」という価値観は問題です。「教育」で乗り越えられる限界を知る事が重要です。
- ・子どもの周りを取り巻く大人が子どもどころではなくなっています。「競争」に勝ち残れなかったと感じる多くの親たちが不安を感じながら子育てをしています。そして、教師も学力向上と教職員評価に重点をおき、子どものことを見る余裕がなくなっています。
- ・子どもの話に耳を傾けることが大切です。子どもの声を大人たちが代弁しているつもりでも、それは「教育的配慮」のもとに歪曲され、結局問題の解決には至らないことがあります。
- ・構造的暴力（1969年、平和研究者ヨハン・ガルトウングが提唱した。置かれているひどい状況が人々を追い詰め、その緊張が暴力を招くということ）が教育においても存在しています。学校の「細かい規律・学力重視」が子どもに多大なストレスを与えます。ストレスフルになった子どもは「なぜ自分はできないのか」と自分を責め、問題を起こしてしまう、このサイクルが教育における構造的暴力です。
- ・構造的暴力をつくらないことが大切です。そのためには「エンパワメント」の考え方が重要になってきます。
- ・エンパワメントという言葉は、一般には「励ます」や「力づける」という意味で用いられますが、本来は「緊張をゆるめる」という意味です。エンパワメントは人が本来持つ力を発揮するために、少しずつ困難を取り除き、公平な社会を実現しようという考え方です。必要なのは、「緊張をゆるめる」ことなのです。
- ・人は承認をされないと生きていけません。存在承認（ありのままを承認）が大切です。何かをしたから認められる業績承認ではありません。子どもが自分で自分自身を認められるようにすること、それができる社会を構想していくことが必要です。



☆アンケートより（抜粋）☆

・今日は参加して大変良かったです。娘が小学校から持ち帰ったチラシで、これからいじめははじまってくる年齢なので、と参考にしく勉強したくて参加しました。共感することの大切さを改めて感じました。

・確かに小さな「いじめ」を目撃した時に、周りが「いけない」という事を伝えると、できなくなると思います。

・現代の子ども達をとりまく環境（SNS、スマホ）などについて、わかりやすくお話いただき、ありがとうございました。子ども、大人がともに考えていかねばならないテーマであり、考えさせられました。一保護者として、今後子どもとの関わりについて活用させていただきます。

・面白く、勉強になりました。ありがとうございました。2時間があっという間でした。またお話を聴く機会があれば、聴きに行きたいです。

・いじめの発生する根本的な社会のお話が聞けて考えることがたくさんありました。

・日本国内だけではなく、海外との比較や違いを聞いたことによって、あらためて自分たちの住む日本の現状を見なおす（知る）機会になった。

